

# 第14回 日本構造医学会 東京学術会議特集



2009年10月11日 於. 学士会館(東京・千代田区)

## 全国から約300人の会員が参加

10月11日、日本構造医学会は秋晴れの好天のもと東京・千代田区の学士会館において第14回東京学術会議を開催した。会場には全国から約300人の会員が集った。

今大会の学会長は緒方人己氏。緒方氏は学会長挨拶で、「近代科学は、光は粒子であり波であること、音は音波であることなどを説明してきた。しかしニュートンが発見する以前からある重力については未明のことも数多い。構造医学は医療の世界に初めてその重力の概念を導入し発展をつづけているが、私たちは歴史上の証人として、この事業にリアルタイムに取り組んでいるのだということを自

覚しておきたい」と力強く語った。

その後、学術会議・一般演題(全12演題)の発表に入る。冒頭演題は、発症後20年のパーキンソン病患者に対する構造医学導入後の有効例をまとめた佐藤文在氏・山本泰司氏(ともに兵庫県)による「基本動作の改善からQOL向上を認めたパーキンソン病の症例」に始まり、次に高橋誠氏(神奈川県)宮地尚彦氏(東京都)が取り組んだ通常機序では生じえない肘関節の外傷へのアプローチ「肘関節脱臼症例を通しての考察」がつづき、次の演者・根本伸幸氏(千葉県)は、腰痛におけるWB観察の視点をとおしてAS系・PI t系いずれが多いかの統計を整理し検査スクリーニングの時間短縮に寄与した「腰痛について考

える」を発表、そしてベル麻痺と鑑別できる顔面神経痛に対し電函延転子を用いた軽快例および術後ケロイドの線維組織化に奏効した症例を紹介した内藤昇氏(東京都)の「顔面神経麻痺の臨床例～電函延転子の使用感について」では経時的緩解の様子をカラー写真で提示するなど、いずれの演題とも洞察のきいた独自の研究・考察がうかがえる内容であった。

午後の部に入り、斎藤義之氏



全国から多数の会員が参列した第14回日本構造医学会・東京学術会議会場(東京・学士会館)



緒方人己学会長による開会の挨拶



発表されたすべての演題にコメントを述べる吉田勸持理事長

(東京都)は自身が体験した鎖骨外端骨折へのアプローチとして鎖骨の機能に配慮した整復法と固定法、構造医学スクリーニングなどを呈示した「鎖骨外端骨折を経験して」を紹介、つづいて、土踏まずの構造と役割に加え足にもWBや顎関節に順ずる進行方向を規定し修正するジャイロが組み込まれていることを検証した三島茂氏(東京都)の「足もとを見直す -3-」など、以下、原口誠氏(神奈川県)「追突事故による骨盤環障害発生メカニズムについての考察」、瀧口善郎氏(兵庫県)「生体に適したブラッシング方法～構造医学を学んで」、寛健史氏・藤田潤氏(ともに大阪府)「画像から見た軸圧の再考察」、奥村剛氏(岐阜県)「家族診療記」、加藤進氏(神奈川県)「横座り損傷機転の考察」、河井好照氏(大阪府)「肩関節脱臼における一整復法の考察」とつづいた。

### 吉田理事長が全演題に総括コメント

全演題が終わったあと、吉田勸持理事長に

よる統括が行われ、12演題に対するそれぞれのコメントのあと、次のように述べ、総括を締めくくった。「検証というものは生体においては大変むずかしい。演繹、演繹とよく語られるけれども、はじめに演繹と帰納還元は対義語ではあるが対立語ではないことを理解してほしい。演繹とは想像の世界でも実の世界でもできる。しかし帰納されること・還元されることは想像の世界にはない。だから演繹をする前提のなかには帰納還元された事実がないと空虚な演繹になる可能性がある。ただ、事実関係を知る手段として、演繹は非常に有効な方法であることも知っておいてほしい。そのような意味の演繹を事実関係に沿う形にもっていくことが皆さんの思考する力になり、日々の努力の力となりうるので、このことを踏まえううえで誰もがこれは検証といえるであろうと安定感が生まれてきたら、たぶん医学・医術は安定できる環境になるだろうと私は考えています」。

なお、来年(第15回)は10月3日、大阪府で開催予定。